

---

# 多文化教育実践モデルの社会心理学的分析

—エリン・グルーウェルによる人種間対立を改善する授業実践を事例として—

## A Social Psychological Analysis of the Multicultural Education Model

Erin Gruwell's Practice for Improving Interracial Relations

小川 修平\*

OGAWA Shuhei

---

One of the most critical questions in the field of multicultural education has been how educators can improve relations among racially, ethnically and culturally diverse groups of students at school. In an effort to find some solutions to this complex problem, this research paper examines the pedagogical practice of Erin Gruwell, a teacher at an inner-city high school in Long Beach, California. The Freedom Writers Diary (1999), a book written by Gruwell and her racially diverse students, clearly shows that she led her classes toward a "harmony" among Latinos, Asian, African American and Caucasian students who had segregated themselves and sometimes violently conflicted each other in the wake of the 1992 Los Angeles riots.

In order to clarify the reasons why Gruwell was able to dramatically improve interracial relations in such extremely difficult conditions, this research takes advantage of the two social psychological frameworks: contact hypothesis and social identity theory, and applies these theoretical frameworks to this case analysis. In particular, this paper aims to prove two reasons for the question. First, Gruwell provided her students with opportunities to experience interracial contacts, which reduced prejudice and hostility among the racial groups, thus improving their relations. Second, the students' new collective identity of "the Freedom Writers" reduced the intensity of their dependence on the racial in-group for meeting psychological needs for inclusion, thereby increasing tolerance for

---

\*中央大学大学院文学研究科博士後期課程

other racial groups in general.

Through the analytical process, special attention is given to Gordon Allport's proposed conditions and qualities of effective intergroup contact, and Marilyn Brewer's optimal distinctiveness theory and her reference to the implications of cross-cutting and multiple social identities in better intergroup relations.

## はじめに

多文化教育や異文化間教育において共通している問題意識の一つが、「どのように、異なる背景を持つ生徒たちの間に相互理解や調和をもたらすことができるのか」である。実際、バンクス(James Banks)やベネット(Christine Bennett)によれば、多文化教育には「偏見の軽減」と呼ばれる研究領域が存在し、そこでは、オールポート(Gordon Allport)が唱えた偏見に関する理論が主要な先行研究として位置づけられている[Banks 2004: 10; Bennett 2001: 194]。つまり、多文化教育においては、偏見の軽減を通して人種間の関係を改善することが、主要な研究課題となってきたのである。さらに、1980年代から多文化教育では、実践モデルの必要性が叫ばれ、近年においては、理論先行の傾向が指摘されている[Ramsey et al. 1989: 89; Banks 2004: 3]。

こうした状況の下、本研究では、人種間の関係を改善する多文化教育の実践モデルを模索する一環として、1990年代後半から2000年代にかけて全米のメディアの注目を集め、2007年には映画化もされたフリーダム・ライターズ(Freedom Writers)で知られるエリン・グルーウェル(Erin Gruwell)による教育実践を取り上げたい。何故ならば、人種間対立が顕著に存在したクラス内に、互いの差異を超えた調和を作り出したという点で、この教育実践は、多文化教育の事例研究として取り上げることがふさわしいと考えられるためである。

グルーウェルは、人種間の対立が顕在化したロス暴動<sup>1</sup>の余韻覚めやらぬ1993年から、ロサンゼルス近郊のウィルソン高校で教育実習を行い、翌年からアフリカ系、ヒスパニック系、アジア系、白人が集められた異人種混合の四つのクラスで英語教科を担当した。当時、学校内外での人種間対立に加え、経済的、あるいは社会的な理由を背景として多くの生徒たちは、成績不良や非行、蔓延する暴力などの問題を抱えていた。五年間に渡るグルーウェルのユニークな教育実践は、非行に走る生徒の更生、あるいはマイノリティの例外的な学業達成事例としても卓越している。しかし、この教育実践が、教育界の枠を超え、全米の注目を集めた一つの理由は、当時の人種間対立の象徴でもあるロサンゼルス近郊における彼らの存在が、人種間の融和という米国社

会の理想を、学校の一教室の中で体現していたためであると考えられる。

これまで、このグルーウェルによる教育は、必ずしも多文化教育の文脈で語られてはこなかった。しかし、寛容の精神や人種的調和の達成という主要なテーマに加え、この実践に関しては、生徒の日記やグルーウェルの自伝、新聞や雑誌における記事といった教育実践のプロセスを詳細に描写する記録が存在しており、具体的な実践モデルとしては、格好の研究対象となる。そこで、こうした資料を基に、本研究では、何故、彼女が「教育困難クラス」内の人種間対立を改善し、一つの調和を作り出すことができたのかを、社会心理学における理論を分析視点として、明らかにすることを目的とする。

そして、本研究では、この教育実践が、人種間対立を改善し、調和を実現した理由として以下の二つの仮説を設定する。第一に、この教育実践では、人種間の偏見と対立を軽減するために有効なコンタクト(接触)を実現したためであるという仮説である。この人種間コンタクトの有効性に関連する仮説を設定する理由は、異なる個人間の接触による効果が多文化教育の効果についての主要な根拠にもなっているように、コンタクトは人種間の偏見や対立を軽減する効果があると、一般的に考えられているためである。つまり、ロス暴動の影響を受けたクラス内における人種間対立の状況から人種の差異を超えた調和が実現された背景には、なんらかの卓越した人種間コンタクトの実践があったものと推測されるのである。それ故、ここでは、人種間対立に対する解決法として半世紀以上にわたり社会心理学の分野で研究対象となってきた集団間コンタクトの有効性についての理論を分析枠組みとして、本研究における仮説の妥当性を論証したい。

第二に設定したのが、生徒たちにフリーダム・ライターズというアイデンティティを与えたことで、彼らの人種的アイデンティティに対する依存度が軽減され、結果として人種間対立が改善されたという仮説である。この仮説を設定する理由は、異人種の生徒たちによる団結の背景には、単なるクラスを超えた、新たな社会的アイデンティティの存在が確認されるためである。また、生徒たちの様々な行動や苦難の背景には、それぞれの人種が抱える文化的背景に対する執着があり、そのような心理作用を解明する必要があると考えられるのである。それ故、主に個人の認知心理的な作用として説明されるアイデンティティ理論とは異なり、集団と個人、あるいは差別や対立に関連する社会的アイデンティティ理論を分析視点として、グルーウェルの教育実践の効果を解明したい。

すなわち、本研究では、社会心理学の分野で提示されたコンタクト仮説と社会的アイデンティティ理論を援用して、この教育実践と人種間の相克を超えた調和との因果

関係を明らかにしたいと考える。それ故、本研究は、あくまでも、グルーウェルによる教育の効果を分析するツールとして社会心理学理論を利用するものであり、その分野において実証された理論の妥当性についての検証を意図したものではない。むしろ、本研究は、これらの理論を分析視点として、この教育実践のプロセスと効果を明らかにする教育学研究として位置づけられるものである。しかし、それでも、この事例分析を行う意義は、今日においてもなお頻発する国際社会の人種間あるいは民族間の対立という難問に、教育の視点から、一つの解決を示唆できる点にあると思われる。それでは以下、本論における仮説の論証を行う前提として、グルーウェルの教育実践の概要をレビューし、当時の学校内外での人種間対立の状況が、この教育実践によってどのように変化したのかを確認したい。

## 1. ウィルソン校におけるグルーウェルによる教育実践の概要

グルーウェルの教育実践の概要については、ウィルソン校で彼女の授業を受けた生徒たちによる日記本とグルーウェル本人の自伝が主な情報源となる。さらに、こうした当事者たちの記録を異なる視点から分析した資料として、新聞記事やこの教育実践についての学術論文を挙げるができる<sup>2</sup>。以上のような資料を総合して、グルーウェルの教育実践の概要を時系列的にまとめると以下ようになる。

### 1-1. 1993秋-1994春

1993年秋、グルーウェルは教育実習生としてウィルソン校に赴任し、「教育困難な生徒」という烙印を押された非白人が多数を占める三年生のクラスを担当した。当初、生徒たちは、新人の白人女性教師による授業などには耳を傾けなかった。しかし、生徒たちの関心を引きつけようと努力する日々の中で、彼女は、高校三年の生徒たちがナチのホロコーストの事実すら知らないこと、そして、彼らのほとんどが、実際に銃で狙われた経験があることを知り、貧民街出身の生徒たちの厳しい現実を理解するようになっていく。これを契機に、グルーウェルは生徒たちを、自費でホロコーストについての博物館へ連れていくなど、様々な工夫を通して徐々に生徒たちの学習への関心を高め、彼らとの人間的なつながりを築いていった。

さらに、映画『シンドラーのリスト』を見せるために、白人街の映画館に生徒たちを連れて行き、そこで生徒たちが受けた差別的待遇についての記事が地元紙に掲載される。このことで、グルーウェルは、一部の白人社会から非難や脅迫を受ける一方で、『シンドラーのリスト』の原作者や映画監督のスピルバーグ(Steven Spielberg)と生徒たちを交流させる機会に恵まれた。このような一年間に渡る「逸脱的」な教育実践は、学

校側からの財政的援助が一切受けられず、また、同僚の教師たちとの軋轢を生むものだった。しかし、困難な企画を、自費や寄付によって実現したことで、逆に生徒たちからの信頼と尊敬を集め、この年の終わりには生徒たちが、グルーウェルを一つの求心力としてまとまる兆しがあった。

### 1-2. 1994秋－1995春

この年からグルーウェルは、ウィルソン校の正式な英語教師となる。そして新たに「教育困難」と目された一年生の4クラス、150人の生徒を担当することになった。前年と同様に、多くの生徒たちは、暴力や麻薬、貧困など大きすぎる重荷を背負った者ばかりだった。その状況を1997年のLAタイムズは、記事の冒頭で次のように伝えている。

彼ら(生徒たち)は、クラスメートが殺害されること、貧困、父親たちの服役、母親たちの薬物使用、兄弟たちの死、拒食症、難読症、人種的な侮辱、そして幼年期におけるその他の不幸な出来事に耐えてきた。この子供たちのほとんどが、楽しみで本を読んだことなどは無かった[Wride 1997]。

こうした問題を抱えた生徒たちが、成績の低さとは対照的にポップカルチャーに詳しいことに気づいたグルーウェルは、スラムの現実に向き合わざるを得ない若者についての文学作品や映画を教材として取り上げ、作品を生徒たち自身の身に置き換えて考えさせた。そのため彼らの関心は、自然と困難や逆境に直面した若者たちの姿を扱ったストーリーへと向かっていった。

さらにホロコーストについての博物館へと生徒たちを連れて行くと同時に、実際のホロコーストの生存者をゲストとして招き、逆境に直面した体験を語ってもらった。また、このころ、コンピューター関連企業の創業者ジョン・トゥ(John Tu)からの経済的支援を受け始める。グルーウェルの教育に感銘を受けたトゥは、これ以降、この教育実践における最大の外部支援者となっていった。

### 1-3. 1995秋－1996春

他の教師が、「問題児たち」を引き受けがらなかったこともあり、グルーウェルは前年のクラスを引き続き担当することになった。そして彼女は、『アンネの日記』や1990年代のボスニア・ヘルツェゴビナ紛争での悲惨な体験をズラータ・フィリポヴィチ(Zlata Filipovic)が綴った『ズラータの日記－サラエボからのメッセージ』などを

教材として選んだ。前年と同様に学校からの財政的援助が無かったため、教材をアルバイトで稼いだ自費で生徒全員に買い与えた。

そして、生徒に教材を深く理解させていく中で、アンネを匿ったミーブ・ヒース (Miep Gies) やズラータ本人を招待して実際に話を聞こうという企画が持ち上がる。これを実現することの難しさにも関わらず、生徒たちの心理的变化を認識したグルーウェルは、逆に彼らを劇的に変えるチャンスであると捉え、多くの人々の協力や寄付を得て、こうした困難な企画を次々に実現させていった。

これ以降、生徒たちは、学習に対して貪欲になり、クラスにおける人種的な対立も無くなっていった。とりわけ、ヒースが、アンネを匿った自らの経験を語る中で発した「リーダーを待たず、社会的不正には立ちむかわなければならない」というメッセージは、生徒たちに強い印象を残した [Gruwell 2007: 126-127]。この社会的公正の精神を受け継ぎ、この年、グルーウェルのクラスは、ズラータの訪問をきっかけに、ボスニア支援の寄付を募るバスケットボール大会を開催した。

#### 1-4. 1996秋-1997春

生徒たちの明らかな変化を目にして、彼らを引き続き受け持つ必要性を感じたグルーウェルは、学校内での同意が得られないことを見越し、地区の教育長に直接願い出ることで、この年も引き続きクラスを担当することに成功した。しかし、仕事にのめりこんだことが原因で、この時期、プライベートでは離婚を経験することになる。こうした苦難を、日記につけることを通して乗り越えた自らの経験と、アンネやズラータの日記にヒントを得て、グルーウェルは生徒たちによる日記本の製作を進めた。

また、人種の壁を越えて協力する生徒たちの姿に重ねて、1960年代の公民権運動の中で「フリーダム・ライダーズ (Freedom Riders)」と名乗った異人種混合の活動家たちについてのドキュメンタリーを生徒たちに見せた。そして、このエピソードを基に生徒たちの新しいアイデンティティとしてフリーダム・ライターの生み出され、彼らの活動は、社会的公正を訴えるという色彩を強めていくことになる。また、この年、日記本をワシントンの教育長官に提出するという企画が持ち上がり、グルーウェルと生徒たちは寄付を募り、ワシントンへの校外学習を実現させ、そこで教育長官リチャード・ライリー (Richard Riley) との対面を果たしている。

#### 1-5. 1997秋-1998春

高校の最終年度にあたり、グルーウェルは、生徒たちの大学進学を自らの課題として設定した。そして前年度から講座を持ち始めたナショナル大学を生徒たちに見学さ

せ、また、自分が教える75人の大学院生を生徒150人の進学上の助言者として割り当てた。さらに、進学への最大の障害となる経済的問題については非営利組織を設立し、寄付を募った。

そして、ちょうど同じころ、LAタイムズが、彼女の教育実践を記事に掲載し、これ以降、テレビのニュース番組などからの取材申し込みが殺到した。このメディアからの注目によって、生徒が進学するための基金へは、多額の寄付が集まることになった。さらに、この年、生徒たちの日記本が、大手出版社から出版されることが正式に決定した。

こうした様々な活動の結果、多くの生徒たちが大学への進学を果たし、その中には、コミュニティ・カレッジへ進む者もあれば、UCLA、UCバークレーなど全米の有名大学に進学する者もあった。また、この教育実践の影響は、学業だけにとどまらず、アメリカンフットボールの全米代表になって大学の奨学金を受ける者、メジャーリーグからドラフト指名を受ける生徒なども輩出することになった。1998年、生徒たちの卒業とともに、グルーウェルもウィルソン校を離れ、教育実習生の指導教官として、カリフォルニア州立大学ロングビーチ校に職場を移した。以上が、ウィルソン校におけるグルーウェルによる教育実践の概要である。

## 2. 人種間対立から調和への変化

それでは、ここで本論の仮説を論証する前提として、グルーウェルが赴任した当時のウィルソン校での人種間対立の様相と、彼女の教育実践によって、人種を超えた調和がクラス内に生まれていた事実を確認したい。まず、生徒の日記やグルーウェルの自伝から理解できるのは、学校内での人種間対立は、ロス暴動による影響が大きく、ロス近郊に位置するウィルソン校内での人種間対立もかなり深刻だったことである。当初の生徒たちの日記には次のような記述が見られる。

みんな、人種ごとにきっちり分かれている。学校の外と同じだ。人種ごとに場所が決まっていて、ほかの人種とは交わらない[The Freedom Writers and Gruwell 1999=2007: 21]。

前に友達が射殺されたことや、学校の帰り道でのトラブルのことをいろいろと考えた末、ぼくは銃を買うことに決めた。…(中略)…人種が違うっていうだけでトラブルになるんだから、用意しておくにこしたことはない。このごろはトラブルだらけだ。とにかくぼくは、殺されるのはまっぴらだ[The Freedom Writers

and Gruwell 1999=2007: 28]。

しかし、こうした学校内外での人種間の対立の状況とは別に、一年後の日記にはクラス内での人種間対立の改善を示す記述が見えてくる。例えば、ボスニア支援のバスケットボール大会に参加した、ある他クラスの生徒の次のようなコメントがある。

わたしは今日のことがあってからグルーウェル先生のクラスに入りたくてたまらなくなりました。『クラス』というより、『家族』のようだからです。先生のやり方はうまくて、しかもわかりやすい。だれも肌の色や外見のことを気にしないので、わたしは以前からチームの一員だったような気がしました[The Freedom Writers and Gruwell 1999=2007: 141]。

このような二年目以降の生徒たちによる人種間の調和を示すいくつかの記述は、彼らのはっきりとした心理的变化として認識され、またそれ故に、グルーウェルの教育実践による効果が理解されるのである。それでは、以下、何故、このように人種間対立を改善することができたのかを明らかにしていきたい。

### 3. 仮説1：人種間コンタクトによりもたらされた調和

グルーウェルの教育実践によって人種間対立が改善された第一の理由として挙げられるのが、この教育実践が、人種間の対立や偏見を軽減するコンタクトを実現したためであるという仮説である。ここでは、集団間のコンタクト仮説を理論的枠組みとして、本研究における仮説の妥当性を検証していきたい。

#### 3-1. 理論的枠組み：集団間のコンタクト仮説

コンタクト仮説とは、民族や人種など、異なる集団間における個人的なコンタクトが及ぼす偏見や差別を軽減する効果についての一般的理論であり、その基本的な考え方は、敵対関係にある社会集団に所属する個人間の接触が多ければ多いほど、相互理解を通して、互いに抱く敵意や偏見が軽減され、結果として集団間の関係が改善されるというものである[Forbes 2004]。

社会心理学におけるこのコンタクト仮説の研究において最も重要な先行研究は、オールポート[Allport 1954: 261-282]によるThe Nature of Prejudice (1954)であり、この著作の第16章の記述を基に、その後、以下の四つの条件を満たした場合には、コンタクトによって偏見は軽減されるというのが、この主張の要点であると解釈され



るようになった。その条件とは、各集団間の(1)平等な地位、(2)共通の目標、(3)協力関係、(4)権威からのサポート、である[Pettigrew and Tropp 2006: 752]。

オールポート自身は、パーソナリティの差異や偏見の程度、あるいはコンタクトの質といった変動要因についても言及しており、上記の四条件が満たされれば、どんな場合にも偏見が軽減されるという単純な主張を述べたのではなかった。むしろ、彼は、様々な文脈における量的かつ質的な考察を基に、極端な場合を除いて、一般的には、これらの条件を満たすコンタクトが有効であると主張したのだった。

しかし、それ以降半世紀以上にわたり、この四条件に基づくコンタクト仮説については、主に量的にその妥当性を確認する研究がさかんに行われ、その多くが、実証的に妥当性を裏づけている[Amichai-Hamburger and McKenna 2006]。その中でも、ペティグルーらによる研究[Pettigrew and Tropp 2006: 751-783]は、合計515の先行研究を対象として総括的にコンタクト仮説の妥当性について量的な分析を試み、その結果、集団間のコンタクトは、偏見を軽減することを示す結果が得られたとしている。さらにペティグルーらは、オールポートが示した四つの条件を満たさなくてもコンタクトは有効であり得ること、そして四つの条件を満たした場合には、そうでない場合と比べ、コンタクトの効果が上がるという結果が得られたとも主張している。

この研究では、一連の先行研究が、コンタクト仮説の有効性を裏づけている一方で、今日においてもオールポートの四つの条件以上に明確なモデルが提示されていないことが指摘された[Pettigrew and Tropp 2006: 767]。つまり、現実レベルの認識では、この分野における最近の研究でさえも、オールポートが半世紀以上前に到達したコンタクトの有効性に対する理解の枠組みを出ていないことが明らかになったのである。

それ故、本研究では、以上の先行研究の状況を踏まえ、まず、グルーウェルの教育実践が、異人種間のコンタクトを実現する中で、オールポートの言説に基づく四つの条件を満たしていたかどうかを分析し、グルーウェルのクラスでの人種間コンタクトの一般的有効性を確認したい。そしてさらに、どのような点で、このケースにおけるコンタクトが特徴的だったのかについて、より詳細な分析を試みたい。

### 3-2. 仮説の論証1：オールポートによる四つの条件への適合性

#### (1) クラス運営におけるグルーウェルの教育実践の特徴

基本的に、コンタクト仮説における四つの条件とは、有効な集団間コンタクトが起り得るための環境条件である。こうした環境条件をグルーウェルのクラスが満たしていたかどうかを確認するには、まず、グルーウェルがどのようなクラスづくりを行っていたのかを分析する必要がある。前述のように、当初、クラスは分裂し、人種間コ

ンタクトがまともに行われる状態ではなかった。しかし、こうした状況が改善された背景には、以下のような、クラス運営における、グルーウェルの特徴的な教育実践があった。

第一に、グルーウェルが、学校で疎外されている「問題児」たちに、自費で教材を買い与えたり、校外学習の機会を提供していたことである。例えば、それを示すエピソードとしてグルーウェルが記しているのは、彼女が生徒たちに読ませる教材として『ライ麦畑でつかまえて』の学校所有図書を使おうとした時のことである。教科主任は、上級クラスの生徒たちが使用することを主な理由として、グルーウェルの生徒たちへの教材貸し出しを拒否し、さらに「あなたの生徒たちは、馬鹿すぎてそれを鑑賞することなどはできない」という捨て台詞を残した[Gruwell 2007: 33]。こうした差別的待遇に反発して、グルーウェルは、アルバイトをしながら、自費で生徒全員に新品の本を買い与えるようになっていった。このような、生徒たちが受けた様々な差別や逆境を克服するための闘争は、グルーウェルの教育実践の明らかな特徴であり、生徒たちが進学するための基金の設立もその一環であると解釈できる。

第二の特徴的な教育実践は、グルーウェルが、生徒たちが関心を持ち、また夢中になれる課題を常に提供していたことである。例えば、課題図書を基にした映画制作、ミープ・ヒースやズラータ・フィリポヴィチを招待するための様々な準備、資金集めなどの課題が、生徒たちに次々と課せられた。また、学校の行事としての枠を超え、ボスニア支援のためのバスケットボール大会、出版される日記本の制作と編集、さらには、教育長官と面会し、自分たちの日記を提出するためのワシントン旅行とそれを実現するためのチャリティーコンサートの開催など、わずか数年の間に大きなイベントを次々と成し遂げていった。こうしたかなりの仕事量を必要とする課題を、グルーウェルは、常に生徒たちに与え続けるだけでなく、それを指導し、全て実現させていったのである。

第三の特徴は、「家族的」な雰囲気への創出である。生徒たちの日記には、「学校の家族」、「家族じゃない家族」、あるいは「フリーダム・ライターズという家族」といった記述に示されるような、クラス集団を家族のメタファーによって表現するケースが数多く見られる[The Freedom Writers and Gruwell 1999=2007: 147, 273, 348]。例えば、ある生徒は、クラス集団に対する愛着を、次のように表現している。

フリーダム・ライターズは、おれの大きな心の空洞を埋めてくれた。ここにはいつも自分を気にかけてくれる人がいる。安心できる場所だ。… (中略) …このクラスメートを失うことは、家族を失うのと同じ [The Freedom Writers and

Gruwell 1999=2007: 259]。

これは、グルーウェルが、クラスを、生徒たちにとって、居心地が良く、安心して相談できる仲間がいる「避難所」のような空間につくり上げていたためであると考えられる[The Freedom Writers and Gruwell 1999=2007: 192]。

第四の特徴は、学校の外部に支援者を獲得していたことである。グルーウェルが必要とした教材や校外学習の機会は、既存の教育システムによっては、ほとんど提供されなかった。それ故、彼女が、生徒に的確な課題を与え続けていくためには、学校の外部にいる支援者を獲得する必要がある。例えば、学校の運営管理に関わる事項については、地区の教育長へ支援を求め、また、経済的援助については、起業家のジョン・トゥ、さらにパーティーやイベントの開催にあたっては、自身が勤務していた高級ホテルの人的ネットワークに支援を求めた。特に、トゥからの援助は、資金的援助に留まらず、新品のパソコン36台の寄付や、複数の生徒たちの仕事口の世話などにも及んでおり、生徒たちの日記からも彼に対する感謝と尊敬の念が見て取れる。

以上のように、グルーウェルの教育実践の主な特徴は、「公正な教育資源の提供」、「的確な課題設定」、「家族的な雰囲気づくり」、「外部からの支援の獲得」という四つにまとめることが出来るだろう。それでは、次にこうした特徴を持つ教育実践によってつくられたクラスの環境が、オールポートの言説に基づく四つの条件に適合していたのかについて検証してみたい。

## (2) 四条件への適合性

一般に、コンタクト仮説の四条件とは、(1) 平等な地位、(2) 共通の目標、(3) 協力関係、(4) 権威からのサポート、であるとされている。まず、(1) 平等な地位については、各々の人種間の平等がクラス内に存在したかどうかを確認する必要がある。そもそも平等という抽象的な概念を画一的に測ることは不可能であり、また、ある状況についての各個人の主観的解釈も必然的に異なってくる。しかし、少なくとも、グルーウェルのクラスという「場」と他の「場」において、生徒たちが受けた「待遇」を比較することによって、相対的な「平等の度合い」を分析することは可能であると考えられる。

一方で、グルーウェルのクラス以外で、非白人を主体とする生徒たちは、白人主体で構成される上級クラスの生徒たちと比較して、教材や校外学習の機会などの点で、極めて不平等な待遇を受けてきた。しかし他方、グルーウェルは、「公正な教育資源の提供」を目指しており、これは、彼女が人種を主体とした差別に強く抵抗していたことを示している。つまり、少なくともグルーウェルが、肌の色によって生徒たちの

待遇を変えない教師であったことが理解できるのである。

実際、日記には、あるアフリカ系の生徒が、グルーウェル以外の教師による差別的な言葉や固定観念に、常に苦しんでいたことを示す記述がある。そしてこの生徒は、グルーウェルが、極めて例外的に、マイノリティに対してステレオタイプを持たない教師であったことを述べている[The Freedom Writers and Gruwell 1999=2007: 157-160]。こうした記録から理解できるのは、彼女が、平等感に関して極めて鋭敏な感覚を持っており、生徒たちに、差別感や疎外感を感じさせないための配慮をすることが出来る稀な教師であったことである。

次に、(2)共通の目標については、グルーウェルによる教育実践の「的確な課題設定」という特徴に関係が深い。生徒の日記には、次々に設定されていく課題に生徒たちが熱中し、課題のために、放課後や昼休みにも集まった様子が記されている[The Freedom Writers and Gruwell 1999=2007: 216-217]。こうした活動のいずれもがグループ活動であり、課題の達成ということが、生徒たちの具体的な共通目標になっていった。さらに、単なる課題の達成という身近な共通目標だけではなく、ミーブ・ヒースの訪問以来生徒たちに芽生えたアクティヴィズム(行動主義)と社会的不正の改革が、人種の壁を越えたより大きな共通目標となっていくと考えられる。そしてこの具体的な課題と抽象的な共通目標とを関連づけて生徒が認識していたことを示唆するものとして、ワシントンへの旅費を調達するために開催したコンサートのことを記した、ある生徒の次のような記述を挙げる事ができる。

この『魂の響きチャリティーコンサート』のチケットを買ってくれた人は、150人の高校生を支援するというだけでなく、不寛容への抗議という大きな目標をも支援していることになるのです。…(中略)…アイデア、伝統、精神の多様性こそフリーダム・ライターズが目指すものです[The Freedom Writers and Gruwell 1999=2007: 217-218]。

この記述からは、生徒が、具体的な課題と抽象的な共通目標を関連づけて認識していたことが理解できるのである。

そして第三に、(3)協力関係という条件は、競争的ではない状況とも解釈されている[Banks 1994: 13]が、この競争的ではない環境は、グルーウェルによる「家族的な雰囲気づくり」によってもたらされていたと推測される。何故ならば、生徒たちが、クラスを唯一安心感の得られる空間として認識していたからである。さらに、グルーウェルのクラス内において協力関係が競争関係を上回る状況を典型的に示す例として

挙げられるのが生徒たちの大学進学に関する対応である。通常、大学進学のような個人的問題は、協力関係よりも競争関係が上回ることが連想される。しかし、この点についても、グルーウェルの生徒たちが極めて協力的だったことを示す記述が見られる。UCLAに合格したある生徒は、グルーウェルのクラスと他のクラスでの反応の違いについて以下のように記している。

上級政治学のクラスには圧倒的に白人が多く、黒人はわたし以外に一人、あとはラティーノが二人ですが、そのクラスで合格のことを話したら、即座にこうきかれました。『あなたGPAは何点？ SATでは何点とったの？』まるでわたしなんか合格するのはおかしいといわんばかりでした。一人の子はとりみだして『あなたが合格してわたしが不合格なんて不公平だわ』とわめきだしました。その子はほかの子に向かって『あの子が合格なんて絶対おかしい。黒人だから特別枠で入れたのよ』とまでいっていました。…（中略）…ミズG（グルーウェルの通称）のクラスへ行って合格したことを伝えると、先生はクラス全員の前で大声で発表しました。フリーダム・ライターズはみんな、うわーっと歓声を上げ、わたしに抱きついてきました。みんな、自分が合格したみたい喜んでくれます[The Freedom Writers and Gruwell 1999=2007: 347]。

このようなコメントは、グルーウェルのクラスでは、生徒たちが、競争関係にもなり得る個人の進学問題についてできえも、互いに協力的な姿勢を持っていたことを示している。

第四に、(4)権威からのサポートという条件については、グルーウェルによる教育実践の「外部からの支援の獲得」という特徴に深く関係している。彼女のクラスが、学校の校長や教科主任という「権威」から積極的な支援を受けていたという事実はほとんど見られない。むしろ、学校内の上司や同僚の間でのグルーウェルは、「逸脱者」として四面楚歌の状態に近かったと推測される。それ故、自分が生徒たちにとって意味のあると思う教育活動を実現するために彼女は、学校の枠を越え、外部からの支援を獲得する必要があった。そして、そのような外部支援者の代表が、地区の教育長や起業家のジョン・トゥであったと考えられる。

教育長は、学校長を動かすための教育システムにおける「権威」であり、またトゥの経営する企業は、世界第一位のシェアを誇り、この分野における「権威」でもあった。つまり、彼らの支援は、まさに「権威からのサポート」であり、グルーウェルによる「外部からの支援の獲得」は、より大きな「権威からのサポート」を得るための働きかけで

あったとも解釈できるのである。とりわけその中でも「世論」というおおきな「権威」からのサポートを、メディアからの注目を通して獲得することになり、これによって生徒たちの進学に必要な資金を全米から集めることができたのである。

以上のように、グルーウェルの教育実践には、「平等な待遇への配慮」、「生徒たちによる共通目標の認識」、「生徒相互の協力関係の構築」、そして「より大きな力を持つ権威からの支援」につながる要素が含まれているため、彼女がつくり出すクラス的环境は、オールポートの言説に基づく四つの環境的条件に適合していたと考えられるのである。そしてそれ故にこのクラスで行われるコンタクトには、人種間の対立を改善し、調和を生み出す効果があったと判断できるのである。

### 3-3. 仮説の論証2：グルーウェルが作り出した人種間コンタクトの特徴

以上、これまででは、コンタクトの効果をもたらしめる四つの条件への適合性を明らかにしたが、ここでは、さらに人種間の対立や偏見を軽減した要因を詳細に明らかにするため、このクラスにおけるコンタクトの二つの特徴について考察したい。

#### (1) コンタクトの特徴1：共感や感情移入を生じさせるコンタクト

第一の特徴として挙げられるのが、グルーウェルのクラスにおけるコンタクトが、異なる他者に対して共感や感情移入を生じさせるものであったことである。オールポートは、善意で行われる人種間コンタクトでも、明確な目的がない場合には効果が生じないこと、また無理にお互いを讃えるような不自然な環境からは、マイノリティの集団が得るところは何もないことについて言及した。

そして親善のためのコンタクトが有効となるには、健全なリーダーシップが求められるとの見解を示し、効果的な指導法として、異なる人種や民族が、共通した価値や経験を発見できるように、子ども時代の経験を比較する機会を与えることを提示した [Allport 1954: 278-279]。すなわち、ここでオールポートが示したのは、共通項を発見することを通して、共感や感情移入を可能にする心理的作用を導き出すことがなければ、コンタクトは有効とはなり得ないということだった。

この点、グルーウェルの指導は、他者との間の共通項の発見を通して、共感や感情移入を生じさせることを目的としていた。例えば、グルーウェルの指導には、「ラインゲーム」というものがあり、これは、クラスの中央にテープを張り、その両側に生徒たちを立たせて、グルーウェルが発する質問に対して、答えが「YES」であれば、生徒たちが両側からクラス中央に進み出るといった単純なゲームだった。最初は、食べ物やポップカルチャーなど関心を持ちやすい質問から始め、徐々に家庭環境や、ギャン

グ組織への所属、薬物使用、友人の死などといった厳しい体験へと質問を広げていった。グルーウェルの自伝には、シリアスな質問になればなるほど、生徒たちが、互いの共通項を認識し合う様子が記されている[Gruwell 2007: 93-94]。

また、彼女が授業の教材として選定した書籍は、生徒たちが、自分たちの境遇に照らして共感できる文学作品だった。とりわけ、グルーウェルは、アンネとズラータの日記に生徒たちは共感できると考えていた。何故ならば、民族や国籍こそ異なるものの、彼らと生徒たちは同年齢で、一方が戦争での体験、他方がロス暴動やギャング同士の銃撃を伴う抗争での体験を持ち、互いに似通った孤立感や思春期の不安を抱えていたからである。実際、生徒たちの日記には、彼らがアンネやズラータに対する自らの意外な共感に対して驚きを感じている様子が見られる[The Freedom Writers and Gruwell 1999=2007: 101-105]。

さらに積極的な感情移入能力の開発という点においても、グルーウェルの取り組みはユニークであった。例えば、授業で『デュランゴ・ストリート』というアフリカ系の若者が、鑑別所を出てスラムで生活しながら、本当の父親を探すという物語を読ませ、それを基に生徒が登場人物を演じる映画を製作させた。生徒の日記からは、主人公に境遇の近い生徒が、登場人物に自己を投影していたことが理解される[The Freedom Writers and Gruwell 1999=2007: 43]。

このように一貫してグルーウェルの狙いは、生徒たちに、異なる他者の中に意外な共通項を見いださせ、他者に対しての共感と感情移入の心理を起こさせることだったといえる。オールポートによれば、感情移入の能力は、民族的差異に対して寛容であるパーソナリティに内在する特徴であり[Allport 1954: 436]、その意味で、この能力を開発するグルーウェルの教育実践は、異人種に対して寛容な姿勢を育成する効果があったと分析できるのである。

## (2) コンタクトの特徴2：多角的かつ重層的コンタクト

第二の特徴として、ここでの人種間コンタクトが多角的かつ重層的であったことが挙げられる。実際、このクラスで経験できる他者との交流は様々な社会的コンテキストの中で行われていた。まず、教室内での数々のグループ活動やプロジェクトを通じての人種間コンタクト、さらに、ゲストスピーカーとの交流、起業家との交流、博物館や映画館、グルーウェルがアルバイトをしていた高級ホテルといった場所での他者との交流、有名人や報道記者との交流など、そのコンタクトは、学校の枠を超え、およそ貧民街出身の生徒たちが、通常経験し得ないような機会での異人種間交流を含んでいた。

また、知的レベルでの間接的コンタクトを体験レベルでの直接的コンタクトへとつなげることを通じて、重層的なコンタクトも実現させていた。例えば、授業で読んだ本を基にした映画制作を生徒に行わせたり、また知識としてホロコーストを学ばせると同時に、博物館やホロコーストの生還者という異なる媒体を通じて、学んだ知識に体験としての理解を組み合わせさせていった。言い換えれば、間接的に行われた他者とのコンタクトを直接的コンタクトに変換していったと解釈できるのである。とりわけ、アンネ・フランクを実際に知るミープ・ヒースやズラータ・フィリポヴィチ本人と生徒たちを交流させたことは、その典型例であったと思われる。

オールポートは、集団間の偏見や対立の問題は多面的であり、それを一元的に解決できる方法などはなく、最も賢明なのは、多面的な方略を同時に駆使して問題へ取り組むことであると論じている。さらに、通常の場合には、単なる知識よりも活動や体験を伴う方略の方が問題解決には効果的であるとも述べている [Allport 1954: 507-509]。この言説に従えば、グルーウェルが作り出した多角的かつ、重層的なコンタクトは、人種間対立の改善に大きな効果があったと推測できるのである。

#### 4. 仮説2：新しい社会的アイデンティティの創造による人種間対立の改善

本研究において二つ目の仮説は、フリーダム・ライターズという新たな社会的アイデンティティが、人種的なアイデンティティへの依存や執着を分散させたというものである。ここではタジフェル(Henri Tajfel)に始まる社会的アイデンティティ理論(Social Identity Theory)の系譜を引く研究者であるブリューアー(Marilynn Brewer)によって示された最適弁別性理論(Optimal Distinctiveness Theory)、さらに彼女が論じた社会的アイデンティティと集団間対立との関係についての言説を分析枠組みとして、この仮説の妥当性を検証していきたい。

##### 4.1. 理論的枠組み：社会的アイデンティティ理論

「自分(他人)は黒人である」といった所属集団の自己(他者)意識と、その意識に基づく偏見や差別との関係についての社会心理学の理論として知られるのが、タジフェルらに代表される社会的アイデンティティ理論である。この研究分野は、シェリフ(Muzafer Sherif)らの「泥棒洞窟実験」に代表される「実在的集団の葛藤理論」に対するアンチテーゼとして登場した。すなわち、目標の葛藤が集団間の差別的態度を生み出すと考えたシェリフらに対し、タジフェルら [Tajfel et al. 1971: 149-178] は、集団間に競争が無くても、人が集団に振り分けられる「カテゴリー化」の事実だけで、差別的な態度が形成される可能性を示したのである



ここでタジフェルは、恣意的な基準で集団が作られ、また集団内に相互交渉がほとんどない場合でも集団内の人間をひいきする現象(内集団バイアス)が見られることに着目した。そして、人は、外集団に対して内集団の優越性を確認することで、望ましい社会的アイデンティティを獲得しようとする主張した。つまり、タジフェルらが仮定したのは、内集団と外集団というカテゴリー化によって集団差別が生じること、そして、その差別は、自己高揚の動機により生まれるということだった[Tajfel and Turner 1986: 7-24]。

しかし、自己高揚の動機だけでは、社会的に低い評価を受けている集団に自己同一視している人々が必ずしも、自尊心を失っていない事実、あるいはそうした集団に属する個人が必ずしも自ら逸脱して他の社会集団に移行していかない現象が説明できないことを問題視したブリューアー [Brewer 1991: 475-482]は、それまでの社会的アイデンティティ理論を一步進めた、最適弁別性理論を提起した。この理論では、人間は集団への同化欲求と個人としての差異化欲求という二つの欲求を同時に持ち、これら相反する二つの欲求を同時に満たし得るような集団に自らのアイデンティティを見いだすとされる。

つまり、ブリューアーは、人間は、必ずしも自己高揚の動機のみによって集団的アイデンティティを見いだそうとするのではなく、むしろ、集団に帰属したいという欲求と他人から卓越したいという欲求を、それぞれの環境において同時に満たし得る均衡点を見いだそうとするのだと主張したのである。

そして、このような同化と差異化という二つの欲求のバランスを取りながら最適サイズの集団を見いだそうとする必然的人間心理を前提として、ブリューアーは、「集団間の対立は、どのように軽減できるのか」という問題に一つの示唆を与えている。彼女は、集団間の対立を解消するための解決としてシェリフが提示した上位目標の設定は、集団間での信頼感の欠如や、互いの集団が抱く差異化欲求が脅かされる可能性があることを理由として、常に有効とはなりえないと論じている[Brewer 1999: 436]。

その一方で、もしある個人が、重複的に複数の社会的アイデンティティを持つことができる社会ならば、集団間の対立は、そうでない場合に比べ、軽減され、社会は安定すると主張している。何故ならば、もし複数の社会的アイデンティティの保持が可能であれば、ある個人にとって一人の外集団員が、その他の集団では、内集団員となる事態が生じるからである。すなわち、二極化した場合の「内集団バイアス」の心理の激しさが分散されることにより、必然的に外集団員への寛容度が高まり、対立の心理が軽減されると考えたのである[Brewer 1999: 439]。

つまり、ブリューアーが示唆したこの重複的かつ横断的な集団的アイデンティティ

の効果に関する理論に基づけば、もし、人種間対立の激しい学校における異人種混合集団の成員が、その集団に対して明確な社会的アイデンティティを認識できるようになるとすれば、人種間の対立は軽減されることになる。

本研究では、こうした一連のブリューアーによる社会的アイデンティティ理論に関連した言説を援用して、グルーウェルの教育実践の効果を解明したい。その理由は、主に個人の認知心理的な作用として説明されるアイデンティティ理論とは異なり、社会的アイデンティティ理論は、集団と個人の関係、あるいは集団間の差別や対立との関連でのアイデンティティのあり方を説明しているからである。

とりわけ、ブリューアーの理論に焦点を絞るのは、彼女が提示した最適弁別性理論が、エスニック・マイノリティに属する生徒たちの西洋中心主義的な学校文化を容易に受け入れない心理に理論的な説明を提供しているためである。加えてこの理論は、エスニック・マイノリティの教育問題においてこれまで頻繁に行われてきた、同化主義と多元主義との二者択一的な是非についての議論に、必然的人間心理の側面から、新たな視点を与えることができるためである。それではこの理論に基づいて、グルーウェルの生徒たちが、新たな社会的アイデンティティを獲得していた事実を論証したい。

#### 4-2. 仮説の論証：最適弁別性理論による社会的アイデンティティの存在証明

生徒たちが、フリーダム・ライターズという新たな社会的アイデンティティを獲得していたことを立証するには、最適弁別性理論に基づき、この集団が、同化と差異化という生徒たちが抱く二つの欲求を同時に満たす集団であったのかを検証する必要がある。そして第一に、この集団が、同化欲求を満たしていたかどうかを立証するには、内集団員への外集団員との比較における「良い待遇」、つまり「内集団バイアス」があったことの事実が要件となる。この点については、それを裏づける数多くの事実を確認することができる。

実際、グルーウェルは、学校で疎外され、進学などは望むことができない貧困層の生徒たちに、教育を受ける上でのあらゆる「内集団バイアス」を与えていた。例えば、生徒たちの大学進学を可能とする基金の設立や、校外学習の機会、教材の無料配布といった経済的・物質的な支援から、学習の指導、進学のための助言などといった知識やメンタルな面での支援まで、他の貧困層の生徒では望めないほどの「内集団バイアス」が与えられていた。

こうした「内集団バイアス」は、生徒たちが、一般社会や学校において、外集団として常に排斥されている現実や家庭における悲惨な経験を考えると非常に大きなインパ

クトがあったと考えられる。例えば、この集団で享受できる恩恵について、ある生徒は、次のように語っている。

血のつながった家族とは違って、フリーダム・ライターズはわたしを理解してくれ、ずっとそこにいてくれます。… (中略) … 助言も手助けもしてくれます。小さいときに母さんに捨てられたけれど、母親代わりになろうとしてくれた人はたくさんいました。それがうまくいった人はあまりいなかったのですが、グルーウェル先生は大成功です。わたしは先生とフリーダム・ライターズがしてくれたことに感謝しています。みんなのおかげで、わたしは強い人間になれたのです [The Freedom Writers and Gruwell 1999=2007: 261]。

このように家族を上回る「内集団バイアス」は、生徒たちの集団への帰属欲求を十分に満たすものであったと分析できる。

第二に、差異化の欲求が満たされていたかについては、グルーウェルのクラスに所属する以前の生徒たちの状況と比較して判断することが有効であると考えられる。グルーウェルのクラスに帰属意識を持つ以前は、生徒たちの多くが、ギャングやその他各人種別ごとの何らかの小グループに属することによって、同化欲求を満たしていたと推測される。しかし、生徒たちにとって、そのような集団への帰属は、必ずしも差異化欲求を十分に満たすものではなかったと考えられる。何故ならば、そうした所属は、暴力による危険や社会的制裁、あるいは差別や排斥といった厳しい現実を伴ったからである。例えば、ギャングのメンバーで当時、保護観察中だったあるヒスパニック系の女子生徒は、次のように述べている。

私は、母のように15歳で妊娠したくない。父のように残りの人生を監獄で過ごしたくない。そしていこのように18歳で墓に埋められたくはない。私は変わりたい」 [Gruwell 2007: 107]。

このコメントから理解できることは、父親から民族の誇りの重要性和血の結束の掟を強く教え込まれてきたこの女子生徒が、家族や同胞の生き方から逸脱したいという明確な差異化欲求を抱いていた事実である。

最適弁別性理論によってこの心理状態を解釈すれば、彼女の同化欲求が満たされることは、彼女自身の脱個性化を招き、差異化欲求が脅かされることになる。そうなるべ彼女は、必然的に自分は他とは異なるユニークな集団の一員であるという感覚を得

ることでその差異化欲求を埋め合わせようとする。しかし、上記のコメントには、ギャングやその他の人種の集団へ帰属しても、差異化欲求が必ずしも十分に満たされない葛藤が現れている。

これに対し、フリーダム・ライターズには、社会奉仕活動、全米メディアの注目、著名人との交流、出版などといった点で、生徒たちが、容易に集団自体のユニークさを感じる事ができたと分析できる。また、グルーウェルの教育を受けることによって、家族で初めての高卒業、あるいは大学進学を達成したことは、個人としての差異化欲求をも十分に満たすものであったと言える。さらに、クラス内で「他人種から危害を加えられない」という「内集団バイアス」の恩恵が、そのまま「人種間の融和」という崇高な理想を実現する集団の特徴として生徒たちの差異化欲求を満たしていたとも解釈できるのである。

以上のように、フリーダム・ライターズは生徒たちの同化と差異化という二つの欲求を同時に満たす集団であることが確認され、その状況は、他の各人種別の小グループよりも相対的に生徒たちにとって望ましいものであったと考えられる。それ故、最適弁別性理論に基づき、フリーダム・ライターズは、生徒たちが抱く主要な社会的アイデンティティの対象となったと言える。実際、グルーウェルは、生徒たちが、フリーダム・ライターズという集団に誇りとアイデンティティを感じている様子を記述している[Gruwell 2007: 154]。

そして、重複的な複数の社会的アイデンティティの存在は、集団間の対立を緩和させることになるというブリュアーの言説に従えば、人種間対立の激しいウィルソン校における異人種混合クラスの生徒が、もしクラスという集団に社会的アイデンティティを認識できたとすれば、必然的に人種間対立は軽減されたという仮説が成り立つことになる。

## おわりに

以上、本研究では、エリン・グルーウェルの教育実践によって実現された人種間対立の改善に焦点を絞り、これが実現された理由として二つの仮説を設定した。第一の仮説は、この教育実践が、人種間の偏見と対立を解決するために有効なコンタクトを提供していたというものである。そしてこの仮説の論証は、以下の二つの側面から行った。

第一に、人種間コンタクトが行われる環境が、オールポートの言説に基づく四つの条件に適合していたことを確認し、偏見や対立に対する有効性を論証した。第二に、グルーウェルのクラスにおける人種間コンタクトの二つの特徴を抽出し、その二つの

特徴が、オールポートにより示された有効なコンタクトの特徴に適合していることを確認した。ここでの二つの特徴とは、他者に対する共感や感情移入を生起させる効果を持っていたこと、そしてコンタクトが、多角的かつ重層的に行われたということであった。

第二に設定した仮説は、生徒たちにフリーダム・ライターズという新たな社会的アイデンティティを与えたことで、彼らの人種的アイデンティティに対する依存度が軽減され、結果として人種間の分裂と対立が無くなったためであるというものである。この仮説は、ブリューアーが示唆した、重複して複数の社会的アイデンティティを個人が持つことは、集団間の対立を軽減し、社会の安定につながるという言説に基づいて設定された。そして生徒たちが、明確な社会的アイデンティティを獲得していたという仮定については、最適弁別性理論に基づき、フリーダム・ライターズという集団が、生徒たちの帰属と差異化という二つの欲求を同時に、かつ最適な形で満足させていたことを確認することによって論証した。

以上の考察の結果、本研究における二つの仮説はそれぞれに成り立ち、それ故にグループウェアルの教育実践は、異人種で構成されるクラス内に調和を実現していたと結論づけられる。また、本研究で論証された複数の重複する社会的アイデンティティを持つことで、人種間の対立を解決し得るというテーゼは、異なる集団に属する個人による新たな枠組みの中での密接な接触を必要とする点でコンタクト仮説が前提にもなり、同時にその仮説の妥当性の裏づけにもなっている。その意味でこの二つの仮説は、相互に補完し合う関係にあるとも言える。

期せずして、本研究で論証された「新たな集団的アイデンティティの創出が、人種間対立に解決をもたらす」というテーゼは、批判的教育学において主張されてきた「学校空間における生徒によるアイデンティティのリメイク(作り直し)」というテーゼ[Giroux 1993: 81]の妥当性を、異分野における理論的枠組みによって裏づけることになった。そしてその意味で、今後、明確な実践モデルを持たない批判的教育学におけるこの教育実践の価値を再検討する必要もあると考えられる。何故ならば、近年の多文化教育は、ペダゴジー(教授法)としての批判的教育学を取り入れる傾向にあり、批判的教育学の理論や教育哲学に対するこの教育実践の適合性を明らかにすることは、多文化教育の実践モデルとしての価値をさらに高めることにつながると考えられるためである。

さらに、この新人教師による極めて逸脱的な実践が、明らかな効果を生んでいた一方で、学校の同僚からは協力が得られず、むしろ軋轢を生じていた事実についても注目する必要がある。何故ならば、学校制度は、今日の教育学研究においては、中核的

な問題であり、公教育の文脈において、変革を志向し、ある種のコンフリクトを生じさせる実践のあり方については、その意義をしっかりと吟味する必要があると考えられるためである。すなわち、それは、学校制度の硬直性を補完する教育改革の視点から、この教育実践を考察していくことであると想定されるのである。

---

[注]

- <sup>1</sup> ロス暴動は、1992年4月29日からにアメリカ合衆国・ロサンゼルスで、人種間対立を理由に勃発した大規模な暴動。死者52名、負傷者2500名、少なくとも4億4600万ドル相当の財物損壊をもたらした。(データは以下の資料による。)
- DiPasquale, Denise & Glaese, Edward, 1996, "The Los Angeles Riot and the Economics of Urban Unrest," *Journal of Urban Economics* Volume 43, Issue 1, January 1998 : 52-78.
- <sup>2</sup> グルーウェルの教育実践についての研究論文としては、Lundmark, L. (2008)などがある。

[文献]

- Allport, Gordon, 1954, *The Nature of Prejudice*. New York, Perseus.
- Amichai-Hamburger, Yair, & McKenna, Katelyn, 2006, "The contact hypothesis reconsidered: Interacting via the Internet," *Journal of Computer-Mediated Communication*, 11(3), article 7.
- Banks, James, 2004, "Multicultural Education: Historical Development, Dimensions, and Practice" In Banks, James. & Banks, Cherry, (Eds.), *Handbook of Research on Multicultural Education* 2nd ed. CA: Jossey-Bass : 3-29.
- Bennett, Christine, 2001, "Genres of Research in Multicultural Education," *Review of Educational Research*, Vol. 71, No. 2 : 171-217.
- Brewer, Marilynn, 1991, "The Social Self: On Being the Same and Different at the Same Time," *Personality and Social Psychology Bulletin* 17 : 475-482.
- , 1999, "The Psychology of Prejudice: Ingroup Love or Outgroup Hate?," *Journal of Social Issues* 55 (3) : 429-444.
- Forbes, Donald, 2004, "Ethnic Conflict and the Contact Hypothesis" In Yueh-Ting, Lee & Clark, McCauley & Fathali, Moghaddam & Stephen, Worchel (Eds.) 2004, *The Psychology of Ethnic and Cultural Conflict*. CN: Praeger.
- The Freedom Writers & Gruwell, Erin, 1999, *The Freedom Writers Diary: How a Teacher and 150 Teens Used Writing to Change Themselves and the World Around Them*, Broadway. (=2007, 田中奈津子訳『フリーダム・ライターズ』講談社) .
- Giroux, Henry, 1993, *Living Dangerously : Multiculturalism and the Politics of Difference*. New York: Peter Lang.
- Gruwell, Erin, 2007, *Teach with your Heart: Lessons I learned from the Freedom Writers*. New York : Broadway Books.
- Lundmark, Leonard, 2008, "Erin Gruwell and The Freedom Writers Diary: An Experiment in Pedagogy" *Bulletin of the Faculty of Education*, Wakayama University. Educational science 58 : 127-131.

- Pettigrew, Thomas & Tropp, Linda, 2006, "A Meta-analytic Test of Intergroup Contact Theory," *Journal of Personality and Social Psychology* Vol. 90(5) : 751-783.
- Ramsey, Patricia & Vold, Edwina, Battle & Williams, Leslie, 1989, *Multicultural Education : A Source Book* NewYork & London: Garland.
- Tajfel, Henri & Billing, Michael, & Bundy, Rbert, & Flament, Claude, 1971, "Social Categorization and Intergroup Behaviour," *European Journal of Social Psychology* 1:149-178.
- Tajfel, Henri & Turner, John, 1986, "The social identity theory of inter-group behavior," In Worchel, Stephen, & Austin, William, (Eds.), *Psychology of Intergroup Relations*, Chicago: Nelson-Hall: 7-24.
- Wride, Nancy, 1997, "Truth Stronger Than Friction Troubled Teens Find Hope Amid Holocaust," *Los Angeles Times*, October 12, 1997.

